



住みよい幸せな国づくり

NPO 法人
日本・デンマーク
生活研究所【会報】
第 10 号 (2014 年 4 月)
発行人 千葉 忠夫

* デンマーク生活便り ⑩ *

高齢者福祉(1)

理事長 千葉忠夫

1959年法にノーマリゼーションが説明されたからと言って、直ちにノーマリゼーションが実践されたわけではなかった。知的障がい者の施設は特別福祉政策として国の管轄で運営していたが1980年から5年の歳月をかけ国の管轄から県が管轄する施設へと、地方分権の政策に同調し逐次実施されていった。1980年代にはデンマークには14の県が存在していたので国の大規模収容施設は14の県に分散されて行った。しかしながら各県に一つの割合で分散された施設も1000人から1500人あまりを収容する大施設には変わりなかった。これらの大施設は町から遠く離れた処にあり、静かに、清潔で、規則正しい生活が目的で知的障害者の学習やアクティビティ、労働面への配慮が殆んどなされていなかった。一部屋に数人以上が収容されていて個室などは全く無い状態であった。1985年代からのノーマリゼーションの実践には眼を見張るものがある。先ずは大規模施設の中で小舎制への移行が実施され個室化が進んでいった。住民たちの希望が反映されるような施設、小舎制の中で更に10人位ずつのグループに居住区分け、なるべく家族に近い生活環境に近づけていった。日中のアクティビティも教育面、労働面でも充実してきた。授産施設は定員を満たすものであり、作業が無理な知的障がい者にはデイセンターが用意された。更に重度の障がい者にはデイホームが設けられ感覚トレーニング、身体のリハビリテーションなどが為された。1990年代に入ると知的障がい者の生き甲斐のある人生(QOL)が倫理的ならびに道徳的観点から考慮されるようになった。1995年には成人の知的障がい者は全員年金を受給できるようになった。以前は施設が知的障がい者を措置費で受け入れ、本人には毎月小遣いだけを渡していたのであった。1998年生活支援法が改正されて社会サービス法になったことはデンマークの社会福祉サービスを大きく変えた。これまで対象者にやってあげる福祉であったのが、対象者が主体となり彼ら住民がどのような福祉サービスを望んでいるかを把握して彼ら住民のニーズを満たす福祉サービスへと変遷したのである。

* 真の民主主義とは ⑨ *

理事 前田正志

デンマークをはじめとする北欧の民主主義社会の基盤には、厳しい気候や痩せた土地という地理的条件も影響したと考えられます。長く厳しい冬を越すためには食料や燃料の確保など相当の準備が必要です。しかも緯度が高く、気温や土壌、日照の条件は良くありません。冬の備えのためにコミュニティーの全員がしっかり働く必要があります。そのため、交易や略奪などで遠征するバイキング(男性)の留守を預かる女性や奴隷の役割は単なる労働力という以上に重要で、社会的地位も低くなかったようです。厳しい自然条件の影響により北欧社会ではお互いの役割が対等に近く、お互いに感謝し、尊重し合うことで共生・連帯の博愛精神が養われたものと考えます。

【第9回の実践】

相手の役割に感謝し尊重し合うことで共生・連帯の博愛精神を養おう。

日本を憂える

川島正仁

「我が国に必要な人間基礎教育」

私は好きなテニスをプレイするために頻りにリハビリに通っています。隣で手のリハビリをやっていた青年に「どうしたの?」聞いたところ「首のヘルニアで右手の親指と人差し指の間の筋肉が落ちて、ペンを持つことが出来ません。これでは間近に迫っている大学入試に間に合いません。」「それは気の毒だ!このような試験は実に無駄な事だ!」「そのとおりです。しかし今のこの社会システムの中では試験を受けて良い大学に入り良い会社に入る事が必要です。」「君は若いのにこの日本の組織の事が理解できるとは感心だ。しかしいま大事な事は君が言うように受験にパスすることだ。その時に私が知っているデンマークの教育の話をしてしよう。」「そうですか、その時はよろしくお願いします。」

私は彼の素直さが気に入った。人間の値打ちはここにあると思う。

この何に対しても素直になれるピュアな気持ちを持つことこそ人間の基本だと思います。

ネパールスタディツアー

会員 プリンティス里美

今年 2 月にネパールへ行ってきました。デンマークから千葉ご夫妻、日本からは女性 5 人・男性 1 人、合計 8 人の参加でした。

今回は高齢者のためのデイケアセンター建設予定地を確認することも目的の一つでした。昨年春の日欧文化交流学院・社会福祉コースの卒論発表時に、ネパールに高齢者施設を造ろうと千葉さんから提案され、この建設予定のセンターを援助することになりました。それに伴って今回のスタディツアーが企画されたのです。

私達が訪ねた町は首都のカトマンズです。カトマンズ空港からは、宿泊先のフジホテルが手配してくれたバンで、フジホテルまで移動しました。

バンから見る町並みは赤い砂ぼこりや至る所に放置されたゴミ、クラクションを鳴らしながら無秩序に走る車、行きかう人達や、ただそこに立ちつくしている人達の多さなどで、今までに見たことのない風景でした。



フジホテルからの眺め

カトマンズ意外にチトワンやルンビニにも足をのぼし、ジャングルの中のホテルに宿泊し、釈迦の生誕地を訪れました。また民間団体が経営する病院(精神科病棟)、ジャングルの中の寺院や国立老人ホームも訪れました。そこには小さな集落があり、歳を取り最期をここで過ごしたいと申し出れば誰でも受け入れてくれる建物や寺院もありました。近くにガンジス川へつながる川があり、亡くなった後はその川の縁で火葬され、遺灰は川に流すのだそうです。ネパールでは母なる大河へ戻って行けると考えているのです。

その場所はとても質素な所で贅沢はできませんが、自分で選んでこの場所に来たのであれば、最後の時を過ごすには最適な場所なのでしょう。その集落で暮らす高齢者の笑顔が印象的でした。



火葬場

カトマンズにシヴァ神を祭る最大のヒンドゥ教寺院、パシュパティナートがあります。寺に面しているバグマティ川はガンジス河に通ずる支流であるため、火葬台を複数備える火葬場が設けられています。

ヒンドゥ教徒でなければ寺院には入れませんが、そこで火葬するところは、入場料

を払えば誰でも見学することができます。私たち

も見学しました。遺体を清め、積み上げた薪の下に燃料を加え、その上にオレンジ色の布に覆われた遺体を置き、火葬にします。燃料を使うため瞬く間に遺体は炎に包まれ、辺りは火葬の煙が立ち込めます。燃え残ったものは、すべて川に投げ入れてしまいます。終始ビックリするような光景でした。

今回はスタディツアーということで、ボランティアや民間団体の運営する老人ホームと国立老人ホームの両方、民間経営の精神科病院・精神科グループホームなどを訪れました。

ネパールには *sewa* セワという言葉があります。セワは、人の生・老・病・死に対して扶養や介護、配慮などの行いから相互扶助的で社会的かつ宗教的な関わりを意味します。宗教的な意味合いは別として、日本語の世話と似ているように思います。

ネパール社会では宗教的、文化的ならびに伝統的な規範に基づく高齢者へのセワが家族や地域で行われ、高齢者は家族・社会から尊敬される立場でした。しかし近代化や民主化が進み、若者が農村を離れ都市へ移住することにより、大家族は崩壊し高齢者が農村地域にとり残されました。高齢者の 85% が農村地帯で生活をしています。

都市部では核家族化が進み、家族が仕事や学校に行き、日中を 1 人で過ごす高齢者も増えています。介護が必要となった高齢者が病院に入院させられ、引き取ろうとしない、寺院や老人ホーム、火葬場の傍に遺棄する、教育や仕事のため海外で暮らす子供たちが親の世話を老人ホームに任せる家族の出現など、セワのかたちが変わりつつあります。

ネパールの老人ホームは家族やコミュニティからセワを拒否された高齢者が遺棄される場所と認識されていました。今でも実際にそのようなケースは残っていますが、その一方で都市部を中心に、多様な運営をしている老人ホームが出現し、ネガティブな考え方に変化が起きています。

ある民間の病院財団が運営している有料老人ホームは、入居者や家族から毎月 6000 ルピーを受け取っていますが、これは富裕層しか支払えない額です。その他、多くの老人ホームは基本無料となっていますが、実際には入居時のみの入居金を支払ったり、会費というかたちで支払っている場合もあります。

いくら支払っているかということで老人ホームのハード面(建物)・サービス面共に大きな差があるなど感じました。それ以上に無料の国立老人ホームは雨風がしのげる場所があるだけまだまじなのかなと思うような所でした。貧富の差は大きく、はっきりしているようです。



民間老人ホームの食事風景

また民間経営は、ほとんど無料奉仕のボランティアや寄付金に頼るところが大きく、存続していくことの難しさが最大の問題になっています。

しかしそんな中でもネパールから学べるものもあると感じました。それは自立した高齢者が多い事です。

建物設備の不備、大部屋であること(多いところで70~80人、少なくとも4人部屋、個室や2人部屋はまれ)、専門的ケアの不十分さ、職員不足などの理由で、高齢者自身が自立しないといけなくなるのですが、出来る事は出来る人が出来る範囲内で職員やボランティアと一緒にやることで自立していく、物理的不備をみんなで工夫していくという自立型も悪くないのではないのでしょうか。職員がいない夜間のトイレ介助や寝たきりになった誰かのセワ(世話)は同室の高齢者がします。

人は誰でも、誰かの役に立てるということは、生きるということに大きな意味を持たせてくれます。年齢は関係ありません。孤独な生活から、友



ジャングルの中の国立老人ホーム・入り口と大部屋

人に出会い毎日充実した生活へ変えることができます。また宗教的な理由になりますが、「この世で良い事をすれば来生で良い事がある」という教えにより世話をしたいという人が集まり、信頼できる善い場、セワ(世話)の場ができるというのも素晴らしいことのように思えます。この文化は続いてほしいです。日本では、このような考え方はもう望めないことなのでしょうか。

最後に一番大きな目的の高齢者デイセンター建設予定地のことを紹介していきます。

カトマンズにある建設予定地は、現在は空き地で国から借用許可が下りています。敷地内の一角には、地域の方たちによる建設中の寺院があります。その隣にセンターを建設する予定にしています。土地はデコボコが多いため、まず土を入れて平らにし、外との境の為の塀を造ります。ここまでの資金はありますが、建物自体は資金が集まったら建設スタートとなります。

予定している建物の1階は面積522 Sq.ft(約49m²)、ワンルームのみで、2階は面積466 Sq.ft(約43m²)、2室1テラスの予定です。隣には

商店が数軒あり、後側には幼稚園があります。

現地の見学、地域の方たちとの話し合いの後、スタディツアー参加者の話し合いの場も持ちました。そこでHaat ra Haat ハット・ラ・ハット(日本語:手と手)というネパール語の会を発足しました。この会を中心に高齢者デイセンター建設費の募金活動を日本でもやっていきます。

千葉さんはデンマークからNordfyns Folkehøjskoleと共に、今回ネパールで発足した「Haat ra Haat」と並行して活動されます。

現在、千葉さんを通してデンマークから100万円、日本からは個人的にお二人から各



ドルガさんと千葉さん

10万円・お一人から5万円、ハット・ラ・ハットから30万円、合計155万円の寄付を現地デイセンター設立発起人 Mrs. Durga Pakhrin(ドルガさん)に寄付してきました。今回のHaat ra Haatの寄付金はデイセンターの土台作りに相当しますので、今後の目標額は350万円です。

今回のスタディツアーで多くのことを学びました。ツアーの最後に現地の看護師・ケースワーカーたちとワークショップを行いました。

ネパールでも日本でも福祉に対する思いは強いですが、これからもまだまだやらないといけない事はたくさんあります。ネパールは貧しく問題はたくさんありますが、高齢者は自分で選択し自立しています。日本はたくさんの物は持っていますが、寂しいと思う高齢者は多く、自分で選択する自由はないように思われます。

デンマークにはデモクラシー(民主主義)が根づいており、福祉に対してもシステムがあり、高齢者・身体障がい者・精神障がい者・知的障がい者を含むすべての国民がしあわせと感じています。デンマークは世界一しわせた国、日本は43位です。いつも千葉さんが言われていますが、本当のデモクラシー、自由・平等・共生・連帯、これを理解しなければ作り出すことはできません。このツアーで日本の福祉の問題点も再確認できたように思います。

ネパールの食事



編集者注1] Sq.ft.

Square footの略

1平方フット(フィート)。1フットは

30.48cmなので、sq.ft.=929.0304 cm²になる。

編集者注2] 写真は筆者の提供ですが、印刷の為に明度を明るく変更してあります。

* 今回のスタディツアーでいただいた資料を少し紹介します。

①年金を受給できる者は行政機関に勤める人とその配偶者のみであり、高齢者全体のわずか7%。ネパールの人口の30%が最低限の生活をしていることから、高齢者は厳しい経済状況にある。

②高齢者の65%が子供たちとの同居世帯で、そのうちの62%が息子との同居である。既婚の娘との同居はタブーとされているためである。女性は再婚が許されていないため、配偶者を亡くし、同居できる子供(男子)がいない場合は単身生活を余儀なくされるので、女性高齢者の問題は深刻だ。

③ネパール政府は、憲法などで高齢者の尊厳を唱え、高齢者のための政策を提案してきたが、ほとんどが計画のまま止まっている。多民族・多言語・多宗教によって構成されている社会にあって、統一した法制度を系統化することは困難であり、財政的な問題も抱えている。

④高齢者手当も1994年ごろから始まっているが、金額はとて低く、十分な補償にはなっていない。また手続きの困難さや制度を知らない高齢者も多く、7割の人が受け取っていない。

* 通常総会のお知らせ *

2014年度通常総会の日が決まりました。

☆ 2014年5月17日 土曜日 午後1時

会場:TKPスター貸会議室日本橋小伝馬町

(中央区日本橋小伝馬町4-1

井門小伝馬町ビル2F)

同封のはがきにて出欠をお知らせください。欠席の場合は委任状(同はがき)もお願いします。

なお、総会終了後懇親会を開きます。出席のご希望も同封のはがきにてお知らせください。

会場:オーベルジュ・ド・ニレーヌ

(中央区日本橋本町4-7-15

ホテルかずさや1F 050-5518-6246

JR 新日本橋駅6番出口徒歩1分)

会費:4,000円

☆ 研修塾のお知らせ ☆

第5回研修塾は、前回と同じ京都で開講します。

☆開講日:2014年9月19日(金)~21日(日)

☆主会場:関西セミナーハウス

☆募集人員:A 宿泊参加者 最大30名

:B 20日のシンポジウムのみ参加者 未定

☆参加費用:A 33,000円(会員30,000円)

:B 未定(会場が確定してから決定)

☆テーマ:若者と女性の社会参画

☆講師:ラッセH. ピーダセン 18歳 男 市議

シーナW. ソオンセン 19歳 女 市議

千葉忠夫(日欧文化交流学院理事長)

未定事項は決まり次第HPに掲載します。

デンマーク研究会開催報告

本会事務局の前田正志さんを中心に、東京でデンマーク研究会を始めました。

第1回は昨年12月28日(土)、8名の参加者が、都内随一の北欧料理店「レストラン・ストックホルム」でスモルガスボードの昼食を楽しみながら、3時間近くにわたって意見交換を行いました。

第2回は2月22日(土)八重洲の貸し会議室でデンマークの福祉概説をテーマに開催しました。

第3回以降の日時・会場は、本会メールマガジンでお知らせします。ふるってご参加ください。

HPで会報が読めます

昨年末からホームページの内容を一新しました。

本会の会報が創刊号から最新号まですべてホームページ上で読めるようになりました。ご利用ください。

掲示板は広告以外利用がないので削除しました。

昨年度の寄付者のお名前

2013年度中にご寄付頂いた方々のお名前を記して法人として感謝の意を表明いたします。

千葉忠夫様 永田正巳様

第4回研修塾に参加された皆様のカンパ

編集後記: ★大震災から三年、復興が進んでいないと悲痛な叫びが聞こえる。それでも民意に背いて原発再稼働を目論む政府がある。巨額の復興予算を騙し取る「復興詐欺」もあった。★一方東北復興支援コンサートをこの三年間で100回開いた友人がいる。全国各地で実行委員や出演者、支援者として延べ四万人が関わった。水俣や夕張、阪神淡路、上越。被災地を支援し続けてきた彼は、東北復興支援コンサート次のステージを始めている。★私たちの仲間がネパールの遺棄老人を救おうと努力している。★悪意に挫けるより善意に集い力を出したいと思う。(茂木俊郎)

発行所

〒292-0801千葉県木更津市請西4-6-9

茂木俊郎 方 Tel:0438-36-3565

Tel:090-9827-9262

NPO法人ホームページ

<http://www.djsli.com>

オフィシャル・メールマガジンをご希望の方は

djsli@hotmail.co.jp まで「メルマガ希望」

とお申し込みください。